

N. クレッツマン等に代表される「分析学派」と呼ばれる立場に対して、著者はその成果を評価し問題意識などは継承しつつも、歴史研究も重視する立場に自らを位置付けている。これが著者の基本的立場であるが、アベラール研究にあっては、「分析学派」に分類されるであろうトゥイーデル以降の論理学分野の研究を評価し継承しつつも、しかし著者が標榜するのはアベラール後期の著作群である倫理学分野の、しかも神学書も内に含まれるような意味での倫理学分野におけるアベラール再評価である。論理的に鋭利ではあっても体系的でなく、ごく限られたアリストテレス論理学に基づいていたためにすぐに時代遅れとなってしまったアベラール論理学に対して、むしろアベラールにおいて評価すべきは包括的で体系的な彼の倫理思想であるというのが著者の主張の要点である。

アベラール研究にあって、一次文献、二次文献とも多くの資料にもとづきつつも、新しいアベラール評価を打ち出した本書は、まず間違いなく、今後のアベラール研究の動向を方向付ける重要な一冊となるであろう。しかし同時に、さらなる検討を必要とする論点を多く含んでいるとも思われる。例えば、著者が議論の前提として持っているアベラール論理学の評価やアベラール存在論への理解などは、論点としてはさらなる批判検討が必要なのではないだろうか。とはいえそれは、本書の欠点となるような「問題」ではなく、むしろ評者には、著者から投げかけられたアベラール評価に関する問題提起なのではないかと思われる。

LECTURA ECKHARDI

Predigten Meister Eckharts von Fachgelehrten gelesen und gedeutet, Bd.I,
herausgegeben von GEORG STEER und LORIS STURLESE,
koordiniert von DAGMAR GOTTSCHALL,
Stuttgart/Berlin/Köln 1998. Verlag W. Kohlhammer, VIII, 336 S.

松 田 美 佳

本書は、エックハルトの全集版ドイツ語ラテン語著作の出版元であるコールハンマー社から出版されている。本書の編集者である Steer と Sturlese はそれぞれ、全集版ドイツ語著作、ラテン語著作の編集に携わっており、現在のエックハルト研究にお

ける指導的研究者である。

本書は、編集者の二人を含む 12 人の専門研究者がそれぞれエックハルトの説教を一つ選び、それを解説するという体裁をとっている。それぞれの解説に先立っては、当該説教の原文および現代ドイツ語訳が掲げられている。編集者の編集方針によると、説教の原文は、基本的には全集版のものが掲載されるべきであるが、必要に応じて新たな編集も認められている。それに対して、現代ドイツ語訳はなるべく新訳が提示されることが求められている。そして、解説方法は担当者自身の裁量に委ねられている。

編集者によると、本書は全集版を補完することを意図として、80 年代半ば以降著しい進展を遂げたエックハルト研究の総決算の目的で編集されている。その間、文献研究に関しては、ドイツ語説教ラテン語著作の両者に関して新たな写本が発見されるとともに、テキスト編纂に関しても写本の伝承史を検証するという視点が Steer などによって重視されるようになり、また説教での自己言及や当時のドミニコ会の典礼書を頼りに各説教の成立年代や相互関係を突き止める作業もなされるようになってきている。他方、思想史研究に関しては、Kurt Flasch, Sturlese, Burkhard Mojsisch などのポッフム大学の研究グループによって、アルベルトゥス・マグヌスに始まりディートリッヒ・フォン・フライベルクに続くドイツ・ケルンのドミニカン学派とエックハルトとの関係にも光が当てられるようになってきている。

本書はタイトル・ページのタイトルの下に「I」と記されていて、続巻が出るのが予期される。全集版のドイツ語著作を「DW」、ラテン語著作を「LW」と略記するのが慣行であるが、本書の略記として「LE I」が本書中で使われている。

それでは、以下に、12 の説教の解説について簡単に紹介しよう（本書で解説されている説教は全集版の番号で記されている）。

1. エックハルトおよびドイツ神秘主義の大家であって、そのエックハルト研究によってエックハルトの生涯と思想を統一的に考察するという視点を開いた Kurt Ruh は説教 4 を訳出解説している。説教 4 は、神の意志への服従、ことばについての言語哲学的考察、被造物の無、魂の内における神の誕生などの主題を含んでいるが、Ruh は、『弁明書』や他の説教を引き合いに出しつつ、また背景にある伝統を明らかにしつつ解説している。興味深いのは、エックハルトの説教は神秘主義的テーマに終始せず倫理的生の問題に常に立ち返っていると彼が言っている点である。
2. エックハルトおよびドイツ神秘主義を専門とする著名なゲルマニスト Alois M

Haas は説教 12 を選んで訳出解説している。説教 12 は、第一に、『弁明書』の計 16 の文を含んでいて、エックハルトに対する異端審問との連関で重要なテキストであり、第二に、Gelassenheit（「放下」「捨離」などと訳される）というその中心主題のために多くの研究者の注目的となってきた。Haas の解説は簡潔で正確であるが、説教 12 の重要性を考えると今後の更なる解明が待たれるところである。

3. Susanne Kübele が訳出し解説している説教 16b は、「像 bilde」についての詳述を含み、子である像と魂の内なる像とを同一視するとして異端審問の対象となった。Kübele はその理由を、ラテン語の *imago* と中高ドイツ語の *bilde* の意味のずれに求め、ドイツ語説教での Paradox や Dynamik はラテン語には翻訳しきれないと主張する。Kübele の冗長な解説は、アウグスティヌスとエックハルトとの関係の考察も含んでいる。

4. イタリア人であるが、エックハルトのみならず中世のドイツ哲学全般に関して指導的な研究を行っている Sturlese は説教 17 を解説している。説教 17 はヨハネ 12, 25 を取り上げているが、Sturlese は、トマスの解釈と比較しつつ、また同じ聖句を取り上げたヨハネ伝註解およびラテン語説教 VI, 4 と対照しつつ、説教 17 の筋道を忠実に追っている。そして、説教 17 が、アルベルトゥスおよびディートリッヒの影響の下にアヴィケンナの「英知的世界 *saeculum intelligibile*」の理論を受容していることを明らかにしている。

5. Oliver Davies が解説している説教 18 は、とくに重要とはおもわれないが、Davies は、永遠の言（ロゴス）に由来する人間の言語の力について説教 18 で言及されていることに注目する。彼によると、エックハルトは新プラトン主義とロゴスの神学を結びつけようとしており、矛盾と否定に満ちたその説教は一種の弁証法によってそれへ導こうとしたものであって、その限りでプラトンの系譜に属する。Davies はエックハルトとデリダを比較して論を締めくくっている。

6. Steer の下で全集版ドイツ語著作の編集作業に参加している Freimut Löser は、説教 19 について解説している。この解説は、聖書の原文を手がかりに、説教の隠された構造を明るみにするとともに、説教での自己言及と典礼書を頼りに他の説教との時間的な連関を明らかにしていくという、文献学の緻密な手法を垣間見させるものである。しかし、説教 19 の成立年代については、Günter Stachel が本書についての辛口の書評（*Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur*, 1998, S. 354-

358) で異論をはのめかしている。

7. Flasch の弟子でディートリッヒやエックハルトを中心とする中世哲学の研究者 Mojsisch は説教 48 を訳出解説している。説教 48 は短い、無となった人間と神との一を働きにおける一として捉え、非被造的な魂の火花による神の根底への突破を説く重要な説教である。Mojsisch の解説も短く、説教 48 の思想を思惟の自己回帰の運動として新プラトン主義的に解釈している。彼はその研究書におけると同様に、「類比、同義、一性」という枠組を解釈の基本に据えているが、人間が無となることと、人間が働きにおいて神と一であることとの連関は更なる解明が必要ではないであろうか。

8. Flasch は、霊の貧の説教として知られる説教 52 を新たに編集訳出し解説している。この説教は、「神の意志すらも意志せず、神が自分のうちで働いていることも知らず、神が自分のうちで働く場所ももたない」という究極的な貧について説くものである。Flasch は、「神が神である原因は私である。私が存在しなかったなら、神も存在しなかったであろう」という箇所の「神」に括弧を付けた Quint の全集版での編集を批判する一方で、新プラトン主義や（新プラトン主義的）アウグスティヌスの系譜に属するものとして説教 52 を位置づけている。そして、アルベルトゥスやディートリッヒなどの歴史的脈絡からの解釈を試みている。説教 52 の背後にはディートリッヒの能動知性の理論が存在するというのが Flasch の論旨である。

9. 中世研究を専門とするゲルマニスト Walter Haug は、説教 63 を新たに編集訳出し解説している。説教 63 は「神は愛である」という聖句の注釈であるが、Haug は、その註解に三位一体論も「神の誕生」の教説も含まれていないことに注目し、その理由を、すべての被造物はその愛によって神を求めているという、神への愛のプラトン主義的連続性を否定し、一者への跳躍を説くという意図に見出している。Haug のこの着眼はたいへん興味深い、すべての被造物はその愛によって神を求めており、その愛は神の自己愛に基づくという思想は、トマス・アクィナスから受容されているようにおもわれる。

10. エックハルトの説教を一つの言語行為として考察している研究書がある Burkhard Hasebrink は、説教 71 を訳出解説している。説教 71 は、パウロの回心についての聖句をてがかりに、「無」について詳述している。その詳述は、神は無であるという否定神学から、被造物の無に進み、人間の認識の否定にまで及ぶ。Hasebrink の解説は、ディオニュシウスの否定神学や雅歌の神秘主義の伝統が説教 71 に取り入れられ

ていることを示すとともに、神についての人間の認識の徹底的な否定のうちに「神の誕生」があるという説教 71 の主旨を浮き彫りにしている。

11. 83 年より全集版ドイツ語著作集の編集者であるゲルマニスト Steer は、全集版ドイツ語著作集第 4 巻に掲載される予定の説教 101 を編集し訳出解説している。説教 101—104 は「神の誕生」をテーマに連続して行われた説教と推測されるが、そのうち説教 101 は最初になされた最も重要な説教であるとされる。Steer の解説は写本の伝承および真正性の検証に始まり、説教の構造を分析した上で、エックハルトの「神の誕生」の独自性を論じている。

12. アメリカの神秘主義研究者である Bernard McGinn は、本書唯一のラテン語説教である説教 IV を解説している。エックハルトのラテン語説教は完成されたものではなく草稿であると考えられている一方で、ドイツ語説教にも通じるさまざまな表現を含んでいる。McGinn が指摘するように、説教 IV も、三位一体についての人間の認識の限界についての表明や、神と世界の関係についての弁証法的表現を含み、また、三位一体内の愛と、神と人間の愛との同一性を説いている。McGinn はそのような説教 IV に、ラテン語著作の三位一体論とドイツ語説教の「三位一体の神の突破」のモチーフとを統一的に理解する手がかりを見ている。ラテン語説教はエックハルト理解にとって重要なテキストであり、Lectura Eckhardi の続巻には更なるラテン語説教が掲載されることを期待したい。

水田英実著『トマス・アキナスの知性論』

創文社、1998 年、xi+290+79 頁

宮 本 久 雄

本書はトマス哲学における「知る」についての論究である。それは著者の言葉をかりれば、「〈知るもの〉と〈知られるもの〉の間に成り立つ関係としての〈知ること〉ではなく、〈知ること〉の成立を通してあくまでも〈知るもの〉としての人間知性のあり方を考察の主題とする」厳しく奥行き深い論究なのである。今は多弁をろうす